

福島県 中学校長会 広報

- ・会長挨拶「令和元年度を振り返って」…… 1
- ・学校教育の今日的課題…… 2
- ・令和元年度県中学校長会の歩みと成果…… 3
- ・専門部会活動の概要(行財政部会・研究部会・進路指導部会・生徒指導部会・広報部会) …… 3～5
- ・小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告 …… 5
- ・第69回東北地区中研究協議会秋田大会の概要 …… 6
- ・第70回全日中研究協議会群馬大会の概要 …… 6
- ・平成31年度県中学校長会主要行事予定 …… 7
- ・支会情報と特色ある経営(安達・田村・両沼・相馬) …… 8～11
- ・随想「教え子」という宝物」…… 12



令和元年度を振り返って

福島県中学校長会長 佐藤 晃
(福島市立福島第四中学校)

今年度は、4月17日、合同開会式及び総会を開催し、218名の会員による新体制の下、本会の活動を開始

しました。

5月1日には、新天皇のご即位に伴い、元号が令和元年と変わり新たな時代を迎えました。そのような中、本会の運営については、様々な状況下にある各学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」という基本方針の基に、各専門部会を中心にこれまでの取組に創意工夫を加えながら、より充実した活動を目指しました。

6月27・28日に開催された第69回東北地区中学校長会研究協議会秋田大会では、本県より107名の会員が参加しました。2日目の研究協議会では、伊達支会の代表者2名が第3分科会において、研究題「自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実」に基づき、8校の校長先生方の英知を結集した研究実践の取組とその成果を発信いただきました。本県及び全国的にも課題となっている学校不適応や不登校生徒への対応の在り方について、貴重な提言をいただきましたことに対し、御礼を申し上げます。

7月12日には、福島県退職校長会との教育懇談会が開催され、佐藤俊市郎新会長様をはじめ、役員の方々に、各学校及び校長が抱えている諸課題やその改善策等をお伝えし、ご理解をいただくとともに、教育諸条件及び教育環境の改善と充実を図るために県退職校長会としても県や国に対して働きかけていくという大変心強いお言葉をいただきました。

7月30・31日には、全日本中学校長会による東日本大震災被災県訪問があり、川越豊彦会長様をはじめ4名の役員をお迎えしました。災害から9

年を経過した本県の復興の状況や防災教育・放射線教育への取組等について懇談しました。また、2日目は、なみえ創成小・中学校を訪問し、災害発生時から現在までの経過等について浪江町教育委員会教育長様はじめ、小・中学校の校長先生方から大変貴重なお話をお伺いしました。さらにその後、津波の被害を受けた当時のまま保管されている請戸小学校を見学しました。東日本大震災及び原子力発電所事故から9年が経過しましたが、避難先で教育活動を継続している中学校が4校、休校2校、県内外に避難する児童生徒数は、約8千人余りと復興は未だ道半ばです。こうした現状を見聞され、全日本中学校長会として今後も支援を継続していくとの考えを述べられました。改めて、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことを肝に銘じ、福島復興創生に寄与すること、さらに、学校経営の最高責任者としてリーダーシップを発揮し、教育課程の効果的な運用と教育環境の整備を図りながら、生徒一人一人に「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育む中学校教育をより一層進展していく考えであります。

学校教育が当面する課題は、災害からの復興創生に加え、生徒指導(いじめ、不登校、虐待、ゲーム依存等)の諸問題、令和3年度からの学習指導要領完全実施に向けた準備、新たな教育改革制度、働き方改革への対応など山積していますが、今後も各支会と連携を深めながら、ONE TEAMとしてチームワークを高め、各専門部会のより積極的な取組を通して、本会の事業及び会務の円滑な推進に努めますので、令和2年も会員の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

終わりに、3月末をもってご退職なされる校長先生方の偉大なるご功績に対しまして、心より感謝と御礼を申し上げあいさついたします。

学校教育の今日的課題

—GIGAスクール構想の
実現に向けて—福島県中学校長会副会長 歌川 哲由
(会津若松市立第三中学校)

教員の働き方改革は、日本型教育の良さはそのままにと、世界に類を見ない全人教育を学校教育に付託したまま抜本的な改革を避け、給特法の一部改正など変化球を次々と投げ、地方自治体と学校現場に向けて采は投げられました。そのような中、本会と小学校長会とが共同で出した『教員の働き方改革』宣言(2020)は画期的であり、次年度の教育課程編成にあたり、様々なアイデアが議論されている頃と思いますし、県内各地で実効的な手立てが講じられていくことを期待したいと思います。教育関係行事は、毎年同じ時期の同じ曜日に組み入れられ、その必要性が検討されないまま機械的に繰り返されるものが多いのは確かです。校長会がまず自ら身を切り、行事を削減しながら、実績をもとに教育関係団体にも呼びかければスリム化は進むだろうと、隙間なく埋められた行事予定を眺めながら考えましたし、そうしておけば、先の宣言はもっと説得力のあるかっこ良いものになったかなとも思い直しています。

さて話は変わりますが、毎日飛び交う教育情報の中で、私が最近ショックを受けたのは、昨年12月に公表された「平成30年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」です。本県の教育用コンピュータ整備状況は全国平均を上回っていますが、国が進めている3人に1台を達成している自治体は半数に満たず、無線LANの整備率は全国最下位レベル、これら情報化のための物理的環境は勿論、教員の情報教育リテラシーも全国レベルを下回り、大きく後塵を拝している現状です。このような状況は、これまでも毎年目にしてきたはずなのに、この度のショックが大きかったのは、国が直前に、学校教育の情報化の更なる推進に大きく舵をきっていたからです。昨年12月に閣議決定された「安心と成長の未来を拓く総合

経済対策」においては、「初等中等教育において、Society 5.0という新たな時代を担う人材の教育環境を速やかに整備するため、高速大容量のネットワーク環境の整備とともに、義務教育段階において、令和5年度までに、全学年の児童生徒一人一人がそれぞれ端末を持ち、十分に活用できる環境の実現を目指すことを明記され、同時に2300億円もの今年度補正予算までつきました。文部科学省においてもすぐさま「GIGAスクール構想」を打ち出し、校内ネットワーク環境の整備に1/2補助、一人一台端末の整備費用4.5万円の定額補助を事業化したのはご存じのとおりですが、措置要件の中には、現行の「教育のICT化に向けた環境整備5か年計画」に基づく、地方財政措置を活用した、端末3クラスに1クラス分の配備計画を推進することも盛り込まれ、手を付けていない自治体に取り残される懸念があります。文部科学大臣も「この実現には、各自治体の首長のリーダーシップが不可欠で、この機を絶対に逃すことなく…」とメッセージで訴えており、この1月には首長と教育長対象のフォーラムまで開催していますが、皆さんの所はどのような状況でしょうか？ICT環境の整備状況は県内市町村間の格差も大きく、今後公教育の水准确保にも大きな影響を及ぼしかねないと危惧しています。ICTによる遠隔教育が法制化され、学習指導要領のコード化が進むなど、ICTを基盤とした先端技術により学校教育環境が変貌を遂げるのは、そう先のことではありません。校長会としても、毎年同じような要望活動をしていますが、このICT環境の整備など、提案的にかつ自治体レベルで実現可能なものを、要望活動の前面に立てていくなど、校長会自身が先を見越して変化していくことを求められる時代の到来を感じています。

令和元年度

「中学校長会の歩みと成果」

事務局長 佐藤 浩哉



平成31年4月17日、15支会218校の校長が会員である第69回福島県中学校長会総会を開催し、佐藤晃会長のもと、新体制による今年度の活動がスタートしました。「学校経営力の向上と

情報交換をとおして教育課題解決に当たること」等を活動方針として各専門部会の活動を中心に各支会の協力を得ながら組織的な取組を推進してきました。

7月30日には、全日本中学校長会川越豊彦会長はじめ、4名の役員が来県され、本県の学校の状況について情報交換を行いました。また、翌日には、浪江町教育委員会教育長様、なみえ創成小・中学校の各校長先生より現状説明をいただき、その後、震災時のままの請戸小学校校舎を視察し、津波による甚大な被害と原子力災害からの復興が道半ばであることをご理解いただきました。

第47回福島県中学校校長会研究協議会は各支会での研究協議会でしたが、各支会の実状を踏まえた実践研究を進め、学校経営力の向上のために十分な情報交換が行われたと報告がありました。

本年度も各部会での活動や各種調査等を通して本県教育の充実・振興に向けた課題をより明確にし、教育行政をはじめ各種団体、関係機関等への要望活動や働きかけを行うことができました。

また、学校が担うべき業務の精選・明確化により「学校における働き方改革」を推進すべく、小中学校長会とともに、「教員の働き方改革」宣言(2020)を策定しました。教員にとって働きやすい環境になるよう、校長としてリーダーシップを発揮し、取り組むことを確認し合いました。

各専門部会におきましては、部会長及び幹事、各支会長・部会長の皆様のご尽力、会員の皆様のご協力により、充実した活動が展開され、大きな成果を収めることができました。改めまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、教育行政上の課題解決に向けて組織的な対策活動に取り組んだ。調査内容については、調査項目を検討し要望活動に反映できるように整理統合しました。

1 活動の重点

- 当面する重要課題の調査研究と課題解決
- 教育諸条件の整備・充実
- 教職員の待遇改善

2 調査研究活動

- (1) 調査Ⅰ：教職員配置等に関する調査
- (2) 調査Ⅲ：教育施策の実施状況調査
- (3) 特別調査：大震災・原発事故の影響に係る調査

3 要望活動

小・中の佐々木会長、佐藤晃会長を中心とする要望団を組織し、9月に要望活動を行いました。

(1) 面談(要望内容説明)

- ① 福島県人事委員会
- ② 県議会議員政党等

(2) 要望書届け

- ① 福島県市長会、町村長会
- ② 福島県町村議会議長会、市議会議長会
- ③ 市町村教育委員会、都市教育長会、町村教育長会の代表機関等

(3) 主要要望事項

- ① 教職員の加配について
- ② SC及びSSWRの拡大配置について
- ③ 学級編制基準や教職員定数改善について
- ④ 人材確保のための処遇改善について

4 教育懇談等

関係機関と懇談を行い現状説明等を行った。

- (1) 福島県公立学校退職校長会(7月12日)
- (2) 福島県教育庁関係者(8月19日)

(行財政部会長 大越 一也)

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

研究主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を指標とした8小主題について、「研究の手引き」を活用しながら、各支会・各学校の実態に即して研究を推進しました。

第47回福島県中学校長会研究協議会を各支会ごとに開催し、担当小主題についての発表と協議を行い、研究の深化を図るとともに、その成果を共有しました。

2 研究集録の編集及び刊行

研究主題に基づく調査研究の充実、資料や情報の提供を目的とし、各支会における研究の成果を収めた「研究集録」を刊行し、全会員に配付する中でその成果を共有することができました。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

第69回東北地区中学校長会研究協議会秋田大会及び第70回全日本中学校長会研究協議会群馬大会に参加して、各分科会における研究発表や研究協議を通して、情報収集や情報交換をすることができました。

東北地区中学校長会研究協議会では、第3分科会において伊達支会が生徒指導に関する研究の成果についての発表を行い、有意義な研究協議とすることができました。

4 原発事故に関わり、学校教育が向き合った課題、対応等の発信

震災後9年を経過した福島の実状を記録し累積するために、研究集録の中に、「ふくしまの今」～双葉支会の現状～を継続して掲載し、双葉支会の抱える課題等を全会員で共有しました。

(研究部会長 加藤 芳宏)

● 進路指導部会 ●

1 「生き抜く力」をはぐくむキャリア教育の視点にたった進路指導の充実

各支会において、キャリア教育の視点を重視し、地域の実情に即した進路指導の推進を図るとともに、部会長会・代表部会長会で協議・情報交換を行い進路指導の体制等の改善・充実に図りました。

2 高等学校入学者選抜方法改善への対応と連携

「進路指導に関する調査」の集計結果をもと

に、県立高等学校入学者選抜事務調整会議で提案事項について意見を述べました。

また、「調査書記入用略称一覧」を変更点や加筆の部分を確認して県中学校長会のホームページに掲載し、全高等学校及び県・私立中学校と共通理解を図りました。

3 「中学生生活と進路」〈福島県版〉の編集

副読本「中学生生活と進路」の部分改訂にあたり、全国版と県版の内容の整合性を図るとともに、生徒の実態や本県の状況に応じた内容となるように改善を加えました。写真やイラスト、図版、統計資料を最新のものに差し替えるとともに、全学年に新たな入学者選抜制度について調べるページを作成しました。

4 進路指導に関する諸調査の実施

全県一斉の「進路動向調査」を2回実施し、福島県中学校長会のホームページに掲載しました。集計結果一覧を県立高等学校前期入試の特色選抜・連携型選抜と一般選抜について、区分を設けて集計できるようにしました。

また、令和元年度末実施の「進路指導に関する調査」について調査項目及び内容の見直しを図りました。

5 高等学校体験入学等における「引率」の定義を明確にし、生徒事故への対応に備えました。

(進路指導部会長 石川 幸男)

● 生徒指導部会 ●

1 自己指導能力の育成と規範意識の向上

各学校において、校長がリーダーシップを発揮し、生徒に自己存在感を与え、共感的な人間関係を育成する教育活動が展開されました。しかし、家庭や地域の教育力の低下等から、指導や対応に苦慮する現場の苦悩も報告されています。チームとしての対応や関係機関との連携の必要性が不可欠な事案も増加しています。

2 震災、原発事故等にかかわる課題と当面する諸課題の把握、その解決や未然防止

不登校に関しては、引き続き増加傾向にあります。SCやSSWR、関係機関との連携による対応が望まれます。いじめに関しては、認知件数が増加し、危機意識を持って早期解決に努める現場の姿勢が感じられます。年々増加傾向にある虐待に関しては、小・中生徒指導部(会)で講演会を開催し、虐待対応への流れや管理職

としての心構えについて理解を深めました。

生徒のスマホ所持率やネット使用時間は確実に増加しています。反社会的行為は落ち着いた状況にありますが、SNSを介し広域化する犯罪やネット依存等、深刻なケースが報告されています。情報モラル教育の一層の充実を図るとともに、行政機関に対し、相談体制の整備や医療機関の設置等、要望活動を継続します。

3 小学校及び高等学校、関係機関等との連携

小学校や地域、関係団体との連携が進み、基本的な生活習慣づくりや安全・防犯指導等に効果をあげています。また、発達障がいやネット利用等の今日的な課題に関して、小・中・高や地域と一体となった指導・協力体制が構築されています。

4 アンケートに基づく生徒手帳の編集、刊行

アンケート調査を参考に、編集委員を中心として編集、刊行することができました。

(生徒指導部会長 渡辺 康弘)

● 広報部会 ●

本年度も、広報誌「福島県中学校長会広報」を2回発行しました。ホームページの維持・管理とともに、要望活動等を記録し、本会及び関係団体等の活動状況や会員に役立つ情報などを提供しました。

【広報の主な編集内容】

1 第162号(7月1日発行)

- 会長就任あいさつ
- 県中学校長会総会の概要及び組織
- 学校教育の今日的課題
- 県中学校長会の活動と運営
- 各専門部活動の概要
- 第70回全日中総会の概要
- 支会情報と特色ある経営
- 新会員紹介及び新会員の声
- 随想

2 第163号(3月1日発行)

- 令和元年度を振り返って
- 学校教育の今日的課題
- 令和元年度県中学校長会の歩みと成果
- 各専門部活動の概要
- 東北地区大会・全日中大会の概要
- 県小中学校合同理事会・中学校理事会報告
- 令和2年度中学校長会主要行事予定
- 令和2年度東北地区中研究協議会概要

○ 支会情報と特色ある経営

○ 随想

(広報部会長 古川 豊)

● 小・中学校合同理事会報告 ●

年間を通じて計4回の合同理事会を、以下の日程・会場・内容で開催しました。

第1回 6月14日(金) 福島グリーンパレス

- ・ 組織・計画と連携強化等の報告
- ・ 人事反省、要望活動、教育懇談の協議 等

第2回 8月19日(月) 杉妻会館

- ・ 行財政部調査報告
- ・ 各種団体との教育懇談会の報告
- ・ 要望活動、多忙化解消の取組の協議 等

第3回 12月3日(火) あづま荘

- ・ 教育懇談会、要望活動の実施報告
- ・ 次年度各部調査・合同開会式等の協議
- ・ 教員の働き方改革宣言最終案の協議 等

第4回 2月19日(水) あづま荘

- ・ 退職役員感謝状贈呈式・感謝会の協議・実施
 - ・ 次年度合同開会式・行事計画等の協議 等
- 今年度は、「教員の働き方改革」宣言(2020)を作成・公表し、改革に向けた校長会としての決意を表すとともに、広く県民の皆様にお知らせしました。

● 中学校理事会報告 ●

年間を通じて計5回の理事会を開催しました。

第1回 4月17日(水) 県教育会館

第2回 6月14日(金) 福島グリーンパレス

第3回 8月19日(月) 杉妻会館

第4回 12月3日(火) あづま荘

第5回 2月19・20日(水・木) あづま荘

理事会では、組織運営や各部の年間活動計画と進捗・実施状況の報告、予算・決算、東北・全日中研究協議大会への参加や分担、県研究協議会の準備等を議題に、毎回、活発な協議を行いました。

また、各支会長から支部の現状と課題についての説明・報告の時間を全ての会で設け、県全体で課題を共有し、改善に向けた協議を行いました。特に今年度は、働き方改革や講師不足の現状と改善策について、生徒指導面では不登校・不適応やSNSによるトラブル等、都市部・周辺部の別なく、県全体の喫緊の課題として共有し、組織的な取組と改善策等の協議を通して模索してきました。

第69回東北地区中研究協議会 秋田大会の概要

東北地区中研究協議会が令和元年6月27日(木)・28日(金)の両日、秋田県秋田市文化会館において開催され、本県からは108名が参加しました。

<主な日程と内容等>

第1日 6月27日(木)

理事会、分科会運営委員会 ※ 会長のみ出席
開会式、宣言・決議、全日中報告、県ごとの教育情報交換会

第2日 6月28日(金)

三つの分科会での研究協議、記念講演、閉会式

<第3分科会報告(伊達支会の発表について)>

【研究主題】

「自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実」

【発表者】 国見町立県北中 梅宮 賢 校長先生
発表1 「学校不適応や不登校生徒に対する対応のあり方」

【司会】 桑折町立醸芳中 大木 修 校長先生

【主な発表内容】

- ・ 不登校増加に歯止めがかからない状況を踏まえ、不登校の改善が研究主題に迫る第一歩と捉えた研究
- ・ 2つの視点「校内の組織体制づくり」「関係機関との連携」からの6つの実践の報告
 - ① 不登校担当教諭の校務分掌への位置づけ
 - ② 生徒指導委員会の役割の明確化
 - ③ 保健室・相談室による居場所作り
 - ④ 外部人材の積極的活用
 - ⑤ 近隣公共施設での学習会
 - ⑥ 教委会主導による小学校と連携

【成果○と課題●】

- 組織的取組が継続につながった
- 役割・支援方針明確化が効果的だった
- 関係機関の積極的対応が効果をあげた
- 教員個々の意識の高揚と維持
- 各機関との調整や役割等の検討

協議では、小・中連携の詳細についてや先生方の心のつながり作り、正確な情報の共有の具体策等について積極的な質疑が持たれ、充実した分科会となりました。伊達支会の皆様のご協力、ありがとうございました。

<記念講演>

講師は、秋田出身の山川三太氏。石井漠・土方巽記念国際ダンスフェスティバル『踊る。秋田』のディレクターを務めている経験から、次のようなお話をいただいた。

- ・ 先人の哲学を継承するには「真似る」のではなく「先人の見ていたものを見る」こと
- ・ 絶対的に異なる価値観に触れて、自分自身の価値観を振り返って見ることが大切である等

最後に、会場の校長に対し「結果が出るまでは10年、20年かかるかもしれないが、子どもたちにはぜひ本物を見せてほしい。」とのお願いで講演を締めくくりました。

<終わりに>

今回も、第1日の夜には各県単位での教育情報交換会が開催されました。県内各支会からの参加者が一同に会し、日中に引き続き学校の現状や課題、その解決に向けた学校マネジメント等についての情報共有がなされています。

令和2年度は青森大会となりますので、皆様のご参加をお待ちしております。



第70回全日中研究協議会 群馬大会の概要

全日中研究協議会が令和元年10月23日(水)～25日(金)の3日間、群馬県前橋市のベイシア文化ホールをメイン会場に開催されました。

本県からは、佐藤会長以下事務局9名、各支会から24名、計33名の参加予定でしたが、台風19号・21号の被害の影響により、7名が急遽欠席となりました。

<主な日程と内容等>

第1日 10月23日(水) ※ 会長のみ出席

全日中常任理事会・理事会運営委員会

第2日 10月24日(木)

開会式・文部科学省説明・全体協議会・分科会

第3日 10月25日(金)

アトラクション・全体会・記念講演・閉会式

- 全日中会長・実行委員長・来賓あいさつより
 - ・ Society5.0など、変化の激しい予測困難な時代と言われているが、学校や教師固有の役割は、「子どもたちに明るい未来を創生する力を身につけさせること」である。
 - ・ 新学習指導要領の確実な実施により、変化を見据え、子どもたちが人間ならではの強みを発揮し、自律的に社会に参画するための資質能力を確実に育成することが求められる。
- 文部科学省説明より
 - ・ 日本の節目となる天皇即位の指導や虐待への配慮・対応等について、また教員の勤務時間の上限に関するガイドラインの指針化による各県での条例化促進や変形労働時間制の導入の見通し等について説明がありました。
- 全体協議会より
 - 報告1 いじめによる自殺根絶に向けての提言
 - ・ 策定中の全日中ビジョン3訂版に位置づける予定の「7つの提言」の報告がありました。
 - ・ SNS関係トラブルは学校だけでは解決できない課題が多いため、校長は学校としてできるところとできないところを見極め、関係機

関との連携に活路を見出す必要があるとの報告がありました。

報告2 「明日も来たい」と思える学校

- ・ 「クレームは学校改善の鍵」「チョコボラ(生徒によるちょっとしたボランティア)」「自分株」等、生徒の心を捉える学校経営の実践が報告されました。

○ 分科会 (第1～8分科会)

東北地区は第8分科会を担当し、岩手県と山形県からの発表がありました。

○ アトラクション・全体会

- ・ 伊勢崎市立第三中学校のギター・マンドリン部と、同校吹奏楽部員で構成された合唱団によるすばらしい演奏が披露されました。
- ・ 全体会で大会宣言について説明・提案され、全会一致で大会宣言が決議されました。

○ 記念講演「自己点検のススメ」

講師は小説家 横山 秀夫氏。

講師曰く「警察や教員には独特の雰囲気を感じる。」「正義を教える立場にある教員には、ぜひ自己点検をお勧めしたい。」等、自己を客観的に見つめる目を持つことの大切さについて、示唆に富む講演内容でした。

<終わりに>

発表・報告での学校課題等は共感できるものが多く、解決に向けた取組も大変参考になるものでした。本県や自校での課題解決のヒントを数多く見つけることができた大会となりました。

令和2年度は、和歌山大会となります。



令和2年度県中学校長会主要行事予定

(県、東北地区中、全日中関係)

月	日	県関係	東北地区中・全日中関係
4	9 15	合同事務局会① 総会・理事会①	
5	8 14 20 21 26 28	行財政部合同部会長会① 研究部会長会① 生徒指導部会長会① 進路指導部会長会①	全日中理事会① 全日中第71回総会(～22)
6	1 5 19 25 25	合同事務局会② 合同理事会①、理事会②	東北地区中副会長会① 東北地区中理事会① 東北地区中青森大会(～26)
7	8	行財政部合同代表部会長会① ・広報第164号発行	
8	3 19	合同事務局会③ 合同理事会②、理事会③	

月	日	県関係	東北地区中・全日中関係
9		要望活動	
10	9 21 22	県研究協議会会津大会	全日中理事会② 全日中和歌山大会(～23)
11	17 19	生徒指導部合同部会長会① 研究部会長会②	
12	1	合同部会長会③、理事会④	
1	18 21 22 29 27	研究部代表部会長会① 進路指導部代表部会長会① 生徒指導部代表部会長会①	全日中理事会③ 東北地区副会長②、理事会②
2	8 10 24	合同事務局会④ 行財政部合同部会長会② 合同理事会③、理事会④(～25)	
3	15	・広報第165号発行 会計監査	

●第48回福島県中学校長会研究協議会会津大会●

1 大会主題

『新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学教育』

2 期 日

◇ 令和2年10月9日(金)

3 会 場

◇ 国立磐梯青少年交流の家(猪苗代町)

4 内 容

◇ 「開会式」「記念講演」
「研究協議(8分科会)」

●第70回東北地区中学校長会研究協議会青森大会●

1 期 日

◇ 令和2年6月25日(木)、26日(金)

2 会 場

◇ ホテル青森(青森市)

3 内 容

◇ 第1日 「開会式」「文部科学省行政説明」
◇ 第2日 「研究協議会(3分科会)」
「記念講演」「閉会式」

※講演者

青森山田中副校長 黒田 剛 氏

●第71回全日本中学校長会研究協議会和歌山大会●

1 期 日

◇ 令和2年10月22日(木)、23日(金)

2 会 場

◇ 和歌山

3 内 容

◇ 第1日 「開会式」「文科省説明」
「全体協議会」
「研究協議(8分科会)」

◇ 第2日 「全体会」「記念講演」「閉会式」

※講演者

道成寺院代(住職) 小野 俊成 氏

支会情報と特色ある経営

安 達

安達支会の活動



安達支会長 佐原 聡
(二本松市立二本松第一中学校)

安達支会は、二本松市、本宮市、大玉村の11校の中学校長で構成されています。今年度は、3名が地区内での異動、4名が新会員であり、内2名が新任という状況での組織となりました。各市村の教育施策を踏まえながら、先輩から受け継いできた「安達は一つ」というスローガンの下、会員相互の連携を図り、また、小学校長との連携も進め、地域の実情に応じた特色ある学校経営の充実に取り組んでいます。

1 定例校長会の開催（含む研修会）

各学校の経営上の成果や課題、県理事会や各専門部の活動報告などを踏まえて、安達地区内中学校全体のこととして情報交換や改善策の協議を行い、各校の経営に生かしています。

また、これまでの3年間の道徳教育に係る研究成果を基にして、「特別の教科道徳」実施上の課題解決に向けて、研究を進めています。

2 退職校長会との連携

退職校長会の皆様と現職校長会の会員が、グループ毎に教育課題にかかわる協議を行った後、懇親会で和やかに語り合いました。

3 安達地区中学校高等学校長協議会の開催

地区内の四つの高等学校長と全中学校長で情報交換を行いました。今年は、入試にかかわる新鮮で有意義な情報が得られました。

4 安達地区小中学校長会協議会、各市村校長会との連携

役員会や総会、懇談会などにおいて、地区内の課題や小中連携などについて検討したり、各市村の役員と情報交換を進めたりして、各校の運営に役立てています。

その他、校長会として常に「地区内中学校全体の充実・発展」という視点から、中体連・中教研など地区内各種団体の行事へのかかわりを進めています。

《学校紹介》

災害対応と地域連携

本宮市立本宮第一中学校

令和元年10月13日午前1時過ぎ、台風19号による大雨が峠を越え、ほっとしたのもつかの間、本校の学区である本宮市中心部で河川の氾濫が発生し、広範囲に浸水被害が発生しました。午前5時には本校体育館も追加の避難所になることが決定し、直ちに受け入れを開始しました。同時に全教職員に対し、できる限り生徒の安否確認を行うよう指示しました。その結果、昼頃までに約50人の生徒の自宅が被害を受けたことがわかりました。幸いにも命を落としたり怪我をしたりした生徒はいませんでした。多くの生徒が教科書や制服をはじめとした学用品を失いました。中には大切な家族を失った生徒もいました。



そのような中、保護者や地域の方々から何かできることはないかとの申し出をいただき、2・3日のうちにたくさんの制服や運動着、通学カバン等のご寄付をいただきました。また、地域の衣料品店やスポーツ用品店、教材会社を通じ、各メーカーや出版社から、制服や運動着、教材を無償で提供していただきました。さらにその他の不足した学用品等は全て市が負担してくださり、短期間のうちに学習環境を回復することができました。

今回の災害を通じて、本校教職員の素早く適切な災害対応はもとより、保護者・地域・企業の方々のご協力、本宮市及び本宮市教育委員会の支援の力強さを改めて感じ、心から感謝しております。そして、それらの支援に応えるように、明るく元気に振る舞う生徒達に、誇らしい気持ちも感じています。

今後も被災した生徒の心のケアなどの対応は続きますが、完全復興を目指し、地域と連携して取り組んで参ります。
(校長 渡辺 敏弘)

田村

連携・コミュニケーション



田村支会長 佐藤 和典
(三春町立三春中学校)

田村支会は田村市・小野町・三春町の1市2町の中学校9校で組織されています。平成24年度14校あった中学校は30年度には9校に減少し現在にいたっています。

今年度は中学校・高校よりの新任校長2名、小学校籍より2名、行政より1名と9校中5名の異動という大きな変化のもとでのスタートとなり、少人数ゆえ既存の役職等への役割分担に苦労しつつも、結果として、協議等の際にはそれぞれの校種等の経験をふまえ多様な視点からの意見・情報交換が可能となり、幅と深まりのある協議とすることができました。

田村支会は同地区小学校21校との連携も密で、4月の総会に始まり年間5回の小中学校長連絡会の際に中学校部会を開催し、中学校間の横の連携ばかりではなく小中の縦の連携も積極的に推進できる組織となっています。

合同開催とはなりますが、昨年度は東京電力福島第一・第二原子力発電所を視察、事故後8年目の廃炉作業の進捗状況等について研修の機会をもちました。今年度は秋田大学大学院特別教授の阿部昇先生を講師に、「学力向上に責任を果たす校長の役割」と題して、学力全国トップクラス県の学力向上にむけた理論と実践、校長としての関わりと責任について示唆に富む講演をいただきました。また、2回の新任校長研修会も開催し、新任の校長先生方の抱える課題等について共に考える場を設定しています。さらに、退職なされた校長先生方と現職校長との交流会を開催し、田村支会の今後の教育の在り方等について情報交換もしています。

このように今後も多方面との連携を重視し、田村支会の子どもたちのため、「オール田村」の精神で学校経営にあたり田村地区の教育の充実・発展に努めてまいります。

《学校紹介》

プラス1(ワン)の生き方のできる学校を目指して

小野町立小野中学校

本校は、生徒や先生方一人一人が自分のよさを発見し、昨日よりも今日、今日よりも明日の気持ちで自分を磨いていくプラス1(ワン)の生き方のできる学校を目指しています。今年度は、教育目標である「夢～自立・友愛・健康」を踏まえた3つの合言葉も設定しました。1つ目は「チーム小野」、共に支え合うことを意味します。学級・学年のチーム力、学校全体のチーム力、教職員のチーム力など、チームで支え合い共に高め合うことを大切にする学校を目指します。2つ目は「文武両道」、小野中学校はパワーのある学校を目指します。日々の授業と家庭学習を大切に「確かな学力」を身につけます。部活動では最後まで「諦めない気力・体力」を身につけます。3つ目は「あいさつ日本一」、あいさつは生活の基盤となる力です。あいさつ日本一の学校を目指し、元気なあいさつで笑顔あふれる学校を目指します。「文武両道」では、子どもたちは「今日もプラス1」「明日もプラス1」の心で自分自身を高め、全国英語弁論大会や陸上ジュニアオリンピック大会出場等、すばらしい活躍を見せました。「あいさつ日本一」では、生徒会が13日と25日を「あいさつ強化デー」と提案し、あいさつ運動の増員や各学級での目標設定等、具体的に活動しています。今後も「プラス1」の心で「夢」への挑戦を続ける子どもたちをワンチームで応援していきます。



【文化祭：「秋篁祭」でのビックアート】

(校長 大河原久宗)

両 沼**高め合える両沼支会**

両沼支会長 **高橋 弘悦**
(柳津町立会津柳津学園中学校)

本支会は9校で組織されています。7町村の広域にまたがり、内3校は、50名に満たない僻地小規模校です。今年度の両沼支会は、

9名中6名が転入会員、そのうち5名が新任校長という異例の構成でスタートしました。

両沼支会は、9校それぞれが規模も立地条件も異なり、課題も多様です。一方、少人数のよさを活かし、様々な考え方や意見を気軽に交換できる雰囲気があります。

定例会は、年5回開催していますが、中教研や中体連、その他の諸会議でも情報交換や意見交換を行っており、立場や経験年数を超えて、お互いが高め合える組織になっている、と自負しています。

近年、過疎と学校の小規模校化が加速度的に進み、中体連の諸会議や各種大会のあり方、中教研の研究体制について、具体的に検討を始めるべきではないのか、という気運が高まってきました。これを受け、本支会では、「生徒一人ひとりの健やかな成長」という目的を外すことなく、生徒にとっての利益を第一優先に考えながら、組織のあり方を議論してきました。

全会津で流れができてつつある中体連の支部新人大会の実施検討や春の大会の全会津一本化、中教研組織の合併検討などが主なものですが、これらの問題は、中体連や中教研に任せておけばいいものではありません。校長会が中心となって、数年先を見越し、どのような形になるのが望ましいのか、実現するためのハードルは…、とことあるごとに議論しています。

本支会では、退職校長会との密接な連携もあります。夏休みには、退職校長と現職校長の教育懇談会、懇親会があります。今年度は、動きが激しい昨今の教育改革や新しい学習指導要領の趣旨について、各校の実践内容をもとに報告、議論しました。

両沼中学校長会は、今後も関係団体との連携を密にし、会員相互の意見交換と活動を通して、信頼される学校づくりに努力して参ります。

《学校紹介》**地域とともにある学校づくり****会津美里町立高田中学校**

高田中学校は「地域とともにある魅力ある学校」という学校像を掲げ、郷土理解学習に力を入れています。これは、「早乙女踊りを踊ってみたい。」という一人の生徒の声を受け止め、1学年が平成29年9月から御田植祭の「早乙女踊り」を練習し始めたのがきっかけです。その後、その学年が新1学年に踊りを引き継ぎ、自分達は「太々神楽」「彼岸獅子」という郷土芸能を実際に踊り(舞い)、お囃子を演奏する体験学習へと発展しています。

町教育委員会の『学校支援コーディネーター』の協力により毎週木曜日の午後2時間、保存会の方々に学校へ来ていただき、郷土の歴史や伝統を学び、校内で笛や太鼓の音が気持ちよく聞こえる中3種類の踊り(舞い)を練習しました。毎週10名を超える地域の方々が指導してくださり、伝統芸能への熱い思いが生徒へ伝わっていったと思われれます。踊りに必要な衣装や道具類を実物を真似て手作りする班もありました。

何度かの中間発表を経て、今年度の4月中旬には新入生や保護者、多くの関係者に大々的に学習成果を披露できるまでになりました。御指導いただいた保存会の方々は、その完成ぶりをとても喜んで下さいました。



【太々神楽】



【彼岸獅子】



【早乙女踊り】

平成31年3月28日に会津美里町の「御田植祭」が国重要無形民俗文化財に指定され、地域の喜びと共に生徒たちも新しい学年での郷土理解学習への関心意欲が高まり、2年目の学習活動が進んでいます。今後は、単に地域社会から学ぶだけでなく、複雑な社会に対応できる力の育成を求めて、地域に働きかけ、貢献できるような学校づくりを探っていきたいと思います。

(校長 岩澤 一徳)

相馬

相馬支会の活動



相馬支会長 箭内 仁史
(相馬市立向陽中学校)

相馬支会は、新地町1校、相馬市4校、南相馬市6校、飯館村1校の3市町村12校で組織されています。東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から9年目を迎えようとしています。相馬地区は昨年度より全中学校が地元での再開を果たすことができ、飯館中学校は令和2年4月に3つの小学校と統合して、魅力ある義務教育学校として開校を予定しているなど、復興に向けての大きな前進を感じています。

それでも地域によって復興状況が大きく異なり、人間関係の希薄化によるいじめや不登校、SNSによるトラブルが増大する等、心のケア及び子どもたちの安全・安心な生活の確保を喫緊の課題と捉え、地域の実態に応じて各学校が全力でその解決に取り組んでいます。

主な活動は、中学校独自で行う2回の研修会、相馬地方小中学校長協議会研修会・中学校部会が2回、相双中・高等学校長連絡協議会を1回開催して、情報交換や各学校の悩みや課題を共有し、課題解決に向けて意見を交換し、即実行に移しています。また相馬支会のみならず、双葉支会や相双地区の各中・高等学校長との交流の場も設け、現在及び未来についての相双地区の学校教育の在り方等についての協議も深めています。

目下、次年度の東北中学校長研究大会での発表：テーマ「不登校や学級不適応、いじめ問題等への対応の在り方」に向け、研究実践を深めています。また、震災後初となる中教研県大会県北・相双大会の実施に向け、着々と準備を進めているところであり、震災後の相馬地区の学校教育の取り組みの一端をご覧ください。震災後特に生徒数の減少に伴う教員数の減少という課題もありますが、逆にそれを強みに変え、相互に知恵を出し合い、研修を積み、一致協働して相馬の未来を担う子どもたちの育成に邁進していきます。

《学校紹介》

「温かみのある学校」づくり

相馬市立中村第二中学校

本校は、松川浦県立自然公園を望む場所に立地する、全校生182名の学校です。

平成30年12月に新校舎が落成して、至る所明るい環境で生徒が明るく生き生きと教育活動に取り組んでおります。

今年度は、「学びのスタンダード」推進事業のパイロット校として、これまでの研究実践を踏まえて3年間のまとめの取組をしました。

この取組により、授業や家庭学習にこれまで以上に真剣に取り組む生徒が増えるとともに、リーディングスキルテストの経年比較において現2年生の読解力が大きく向上することができました。

今回は、「温かみのある学校」づくりに向けた取組の一端を紹介します。

本校では、生徒の誕生日に校長手作りの本の葉をプレゼントし、読書推進そして読解力向上などのきっかけにしています。

葉には、その期日と五七五の俳句と誕生花の写真、そして花言葉が入っています。

生徒に葉をプレゼントする際は、給食の時間に校長が教室に出向いて、学級全員の前で「誕生日おめでとう。本をたくさん読んでくださいね。」と言葉を添えて渡しています。

受け取った生徒は、周りの学級の皆から拍手で祝ってもらうとともに、朝の読書で読んでいる本や教科書などに挟んで葉を使っています。

なお、土日や祝日、長期休業中に誕生日を迎える生徒には週末や終業式に葉を手渡しています。

東日本大震災及び原子力災害で被災した家庭が多い地域ですが、これをきっかけに教職員がチームになって一人一人の生徒を大切にして「温かみのある学校」づくりに向けて取り組んでいます。



(校長 星 健一)

「いつの頃だろうか、教師を目指す覚悟を決めたのは…」少なくとも受験先の大学を決めるあたりまで明確な自覚はなかったように思います。心理学に興味があり教育関係の仕事の中で生かすことができればいい、といった漠然とした思いはありましたが、小学校教員をしていた父の教え子たちが、盆だ、正月だといったは父を訪ね、酒を酌み交わし昔話に花を咲かせる姿を見るにつけ、次第に「教え子」という存在に心動かされ、そして教師という職業を意識するようになったように思います。

私の中学校教師としてのスタートは、耶麻郡にある統合したばかりの学校でした。初任者である私は、統合前の3つの中学校から赴任した優秀な先生方に導かれながら、新しい学校をつくっていくという活気溢れる職場で多くのことを学ばせていただきました。1年担任、3年担任を務め、3年目からは学年を任されました。この間、文部省（当時）の研究開発学校の指定校として研究のイロハを学ぶ機会にも恵まれ、中教研では耶麻支部の先生方と三次研を独自に開催するなど、研修の面白さを教えていた

いた時期でもありました。このような経験を積みますと、自信が付き仕事も楽しくなるものです。それが私の場合、理屈っぽく生意気になっていたようで、郡山市の学校に異動して大きな試練を味わうことになりました。1年担任としてスタートしたまではよかったです。2年目は、初任校の時と同じく3年担任へ飛び級し、さらに生徒指導主事も任されることに…。生徒数1,100名、30学級の大規模校でしたので、周囲からは「この学校で生徒指導主事は1年間もてばいい。まして、3年の担任も引き受けるなんて狂気の沙汰」と同情されるありさまでした。初めての経験で身も細るような日々が続きましたが、結果的に生徒指導主事を3年間務め、同僚の先生方の協力もあって、生徒会を中心とした頭髪の自由化やゼッケンの廃止などの校則見直しを実現することができました。この学校で学級担任を務めたのは2年間です

が、それが最後となり、その後学級担任の役目をいただくことは二度とありませんでした。このように長い教職生活の中で私が学級担任として務めたのは延べ4年間、学級数も持ち上がりなしの4学級のみです。その時々在校内事情や与えられたことを精一杯やってきた結果であり、昇任や延べ14年間にわたる行政勤務などの事情があるのですが、どこかで教師の実績として引け目を感じている自分がいて、これまでは、このような事実を積極的に話題にするような場面も理由ありませんでした。

定年退職を間近に控えた今、私の「教え子」はどれくらいいたのだろうか、と今さらではありますが心に懸かります。担任した生徒や、顧問として指導した生徒だけが「教え子」とは限らないのでは、という都合のよい理屈が頭をもたげます。担任や顧問ではなくても「生徒はどう思うか?」「生徒は喜んでいるか?」と、いつも生徒の姿を思いながら仕事をやってきたとの自負があり、私の仕事が間接的であっても生徒の成長に少しでも役に立ったと言えるのなら、その生徒は「教え子」と呼べるだろう、などと勝手に解釈し今の自分を慰めています。

一人の教師の「教え子」が、また次の「教え子」を育てます。教師とは、その教えはもちろん、その生き方そのものが、末広がりにつながられていくすばらしい職業だと思っています（怖い面もあるのですが）。私は、その営みに惹かれ、教師という職業を選びました。私の教師人生を振り返り、学級担任した「教え子」は少ないわけですが、担任以外の仕事を通して繋がったであろう「教え子」はたくさんいるんだと勝手に自分に言い聞かせ、これからの心のよりどころにしていきたいと思います。

今後、管理職の退職者が増えるなかで、若くして担任を外れる人も増えていくでしょう。

『どのような立場でも、教師の宝物として「教え子」を育てることは必ず叶うもの。そう信じて頑張ってください。』

そんな思いを強くしている今日この頃です。

随想



福島県中学校長会副会長
堀田 隆
(郡山市立郡山第一中学校)

「教え子」という宝物